

地域文化の理想像：知識人文化と民衆文化の交錯 についての社会学的考察

著者	荒井 芳廣
雑誌名	人間関係学研究：社会学社会心理学人間福祉学： 大妻女子大学人間関係学部紀要
巻	19
ページ	1-20
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006519/

地域文化の理想像：知識人文化と民衆文化の交錯についての社会学的考察

The Ideal State of Local Culture : Sociological Consideration of Interaction between The Elite Culture and the Popular Culture

荒井 芳廣 *

Yoshihiro ARAI

<キーワード>

地域文化, 民衆文化と知識人文化の一体感, 共有される文化的世界

<要 約>

ブラジル北東部ペルナンブーコ州の州都レシーフェを中心とする地域は豊かな民俗文化が発展しているばかりでなく、それらの創造主体である民衆層ばかりでなく、地域のエリート層も共有する基層文化として芸術的思想的創造の源泉としている。このような地方文化のあり方は、さまざまな形でこの地域の文化を形作っている。「民俗のモザイク」と呼ばれるブラジルの三大都市カルナバルの1つとして多様な民俗的表現を統合しているところに特徴をもつレシーフェのカルナバルもその一つの現れであるが、二つの文化を統合しようとする「民衆文化運動」(1960年代)、「アルモリアル運動」(1970年代)のような文化運動の歴史、地域の事例を通じてブラジル社会の本質にせまった文化人類学者による社会学的著作とその研究視点を博物館や研究所への制度化。本論文の目的は、これらに共通する精神を謡った歌謡の分析を通じて、地域文化のある種の理想像を見ようとするものである。

1. 1988 年のカルナバル調査 ーレシーフェという街との再会

ブラジル民衆本であるリテラトゥーラ・ヂ・コルデウの調査のためにその制作・流通・消費の中心地であったすでに訪れていたレシーフェを再訪したのは、国立民族学博物館の中牧弘允を研究代表者とする科学研究費による海外学術調査「ブラジル民衆文化」において自分が担当する調査テーマとして、ブラジルの3大都市カルナバルの1つであるレシーフェのカルナバルを調査テーマに選んだからであった。大勢の人間が参加する大イベントであるカルナバルを一人で調査するという無謀な試みにあえて挑戦してみようと思いついたのは、「民俗文化のモザイク」と呼ばれ、ブラジルの他の2つの都市カルナバル、リオ・デ・ジャネイロとサルバドールとは異なった特性を持つレシーフェのカルナバルに関心をもったからである。というのはこの調査とは別にリデラトゥーラ・ヂ・コルデルやや人形劇（マムレンゴ）といった民俗文化にルーツを根ざした文化の創造をめざした運動であるアルモリアル運動の調査を始めており、カルナバルとアルモリアル運動という二つの文化現象に共通のものを感じていたからである。

さらにこの年はレシーフェにとって特別な年であった。

1960年代の左派勢力の代表であったミゲル・アライス（Miguel Arrais 1920-1990）が軍政による国外追放から戻り、ペルナンブコ州知事に選出されて、政治の世界の戻ってきた。1960年代にペルナンブコ州知事であった時代、彼は、最低賃金法を定め、無産者農民の運動（MST, Movimento dos Trabalhadores Rurais Sem Terra）を支援した政治家であった。カルナバルの期間中、レシーフェ市庁舎のなかにカルナバル運営委員会が臨時に組織され、市役所の職員のみでなく民間人からメンバーが集められた。筆者はこの委員会から「プレス」カードをもらって、カルナバルの行列のなか入って近くから写真を撮ることが許され、この運営委員会に臨時に選ばれたメンバーと交わる機会

を得た。この中には女優、小学校教員、ラジオ&TV局員、民俗音楽学者として後述のジョアキン・ナブコ研究所の研究所に勤務しながら劇団に属する男優、古書店を営む詩人など様々な人間がいたが、総じて教育程度の高いエリート層に属する人々であった。

この年のカルナバル委員会の委員長には、市の文化担当局長であり女優でもあったレダ・アルベスが就任したが、委員会のメンバーは彼女の人脉であったと解釈される。彼女のパートナーであったエルミロ・ボルバ・フィーリョ（Hermilo Borba Filho, 1917-1976）の人脉でもあったと思われる。エルミロは後述のアリアーノ・スアッスーナと共にペルナンブコ州の学生演劇（TEP）を主宰、その後も一時期サンパウロで活動するが、レシーフェに戻ったのちは、アマチュア劇団の指導、再びアリアーノ・スアッスーナと組んで「ノルデスチ民衆演劇」（TPN）を指導し、いくつかの戯曲を書いた演劇人であった。ノルデスチの左翼知人を代表する人物であり、1960年代の「民衆文化運動」の参加者としてレダ・アルベス、後に「パウロ・フレイレ・メソッド」と呼ばれる識字教育法を生み出したパウロ・フレイレ（Paulo Freire, 1921-1997）と知己を得たのもこの運動を通じてであった。

1988年のカルナバルのメインテーマは、前年の1987年に亡くなった、レシフェ市民から父親のように慕われていたG・フレイレがテーマとなっていた。

カルナバルの調査は、1988年1月2日から始まった。その前年の暮に他の調査メンバー5人と共にサンパウロ市郊のチエテでの民俗調査、大晦日のプライア・グランデ（サントス）での花火とアフロブラジリアンカルトの野外儀礼を観察したのち、メンバーと別れてレシーフェに向かった。その年のカルナバルは2月15日であったので、第1回目の調査は1月2日から2月22日まで行った。なぜ1月2日から始めたかということ、ブラジルのフォークロア・カレンダーでは、カルナバル・シーズンの始まりは、クリスマスシーズンの終わった

翌日から始まるのであるが、クリスマスシーズンは、東方三博士が祝いの品をもってベツレヘムのキリストの家を訪ねる1月6日をもって終了する。実際1月6日の翌日、カルナバル委員会委員長のレダ・アルヴェス女史が記者会見を行い、その年のカルナバルの方針を発表した。カルナバルに参加するレシーフェ市民はこの日からカルナバルの準備を開始するのであるが、筆者も、カルナバルの始まるまでカルナバルに参加するグループの自宅や資料館、博物館、民俗学者への訪問など広くデータの収集に努めた。アフロブラジル宗教とカルナバル・グループというテーマに絞ることはこの作業のなかで決め、翌年の8-9月に行った補足調査ではこのテーマに特化して調査を行った(荒井：1992)。

2. 「フォークロアコミュニケーション」の概念と文化的媒介者

カルナバルの調査の後、レシーフェを中心とする地域の民俗文化と、この地域の文化に関するイデオログとしてG・フレイレを引き継いだ詩人・戯曲家・小説家であるアリアーノ・スアッスーナと彼が指導的役割を果たした芸術運動であるアルモリアル運動の調査のために数回にわたってレシーフェを訪れたが、その度に感じたことはこの地域では、一般市民の民俗文化に対する関心が高く、その距離感の程度はいろいろであっても、教養層と一般民衆層の間の距離が近いということであった。カルナバル調査の10年ほど前にレシーフェを訪れたとき、ブラジルの民衆本であるリテラトゥーラ・ヂ・コルデウを調査対象としたのは、この民衆本が果す文化的役割として教養文化と民衆文化をつなぐ文化的媒介者ないしは文化的媒介物の役割を果たしており、近代的大衆文化の成立にとってそれらの役割が重要なのではないか、こうした存在が、発展途上国が近代化を遂げるうえで必要であり、すでに近代化を果たしたイギリス・フランス・ドイツそしてアメリカ合衆国や日本の文化史のなかにあること、ブラジルにはまさに前近代から近代への移行期として生きた存在として

観察できる状況にあるのではないかという仮説をもっていた。初めてレシーフェを訪れたとき、この地のカトリック大学の教授であったルイス・ベルTRANがこの状況を「フォークコミュニケーション」という概念でとらえていることを知った。この概念は、社会心理学の「イノベーション過程におけるコミュニケーションの2段の流れ」という考え方を、民俗現象の捉え方に適応したもので、図式化すれば次のような考え方である。

発信者（教養層）→（文化的媒介者）
→受信者（民衆層）

発信者（教養層）←（文化的媒介者）
←受信者（民衆層）

すなわち発信者がメッセージを受信者に伝えようとするときに、直接に伝えるのではなく、発信者と受信者のあいだに媒介者が存在するというごく単純ともいえる図式であるが、人類の文化の歴史の中には、この文化的媒介者のカテゴリーに属する存在が、文化的背景や歴史的背景の違いによってさまざまな形があり、とりわけ民俗文化のなかに多くの事例が見いだせるという視点である。リテラトゥーラ・ヂ・コルデウを例にとれば、1960年代のブラジルのように識字率が低く、またマスメディアの普及率の低い国では、新聞やテレビを通じて伝えられるニュースの内容を知ることができない。そうした状況では教養層とは言えないが、ある程度字の読める、マスメディアにアクセスのできる人間で、むしろ受信者に近く、その伝統に習熟した、吟遊詩人、芸能者が、字の読めないマスメディアにアクセスのできない受信者にメッセージを伝える役割を担う人間のカテゴリーが生まれる。リテラトゥーラ・ヂ・コルデウという民衆本、そしてその作者、それを読みながら（韻文で書かれているのであるときは歌いながら）売る販売人はそうしたカテゴリーの人間である。

リテラトゥーラ・ヂ・コルデウにおける、文化的媒介者は、受信者よりの存在であるが、アルモリアル運動に参加した芸術家（詩人、戯曲家、小

説家、版画家、彫刻家、音楽家)は、文化的媒介者の存在を通じて受け取った受信者側のメッセージを、文化的媒介者が用いるメディアを使いながら再利用しているとも言える。リテラトゥーラ・ヂ・コルデウの場合で言えば、再利用されるのは、この民衆本の文学形式(この地域の伝統的歌謡の詩文の形式)、表紙絵に用いられる木版画とそこから発展した民衆版画などである。

3. 地域としてのレシーフェ

3-1 地域としてのブラジル北東部

ブラジル北東部(Nordeste, 以下「ノルデスチ」と呼ぶ)は、9つの州——バイーア、セルジッペ、アラゴアス、ペルナンブーコ、パライーバ、リオ・グランデ・ド・ノルテ、セアラ、ピアウイ、マラニョン——から成る、スペイン、ポルトガル、イタリアの南欧三国を合わせたより以上の広い面積をもつ熱帯的気候の地域である。三方を、アマゾン流域地方を含む北部地方、首都ブラジリアのある中西部地方、リオ・デ・ジャネイロ、サンパウロのある南西部地方に囲まれ、東側の沿岸地帯には、レシーフェ、サルバドールなどの大都市があって政治、経済、文化的にこの地方の中心となっている。レシーフェを州都とするペルナンブーコ州およびこれに隣接する地域は、パライーバ州からバイーア州まで海岸に沿って約100キロの幅で続く、かつてはほとんどが砂糖キビのプランテーションによって占められていた、地味豊かな、「ゾナ・ダ・マータ」(Zona da Mata)と呼ばれるこの地方で人口密度の最も高い地帯と、その内側にあり、適度な雨量をもつ、主として牧畜と綿花の栽培が行われている「アグレステ」(Agreste)、さらにその内陸にある北東部の約半分の面積を占める雨の少ない半乾燥気候の「セルトン」(Sertão, 奥地)の三つの部分から成っている。これら北東部の諸地域はその資源に比して人口密度が高く、それ以上に階層による土地所有面積の差が激しいため、村落地域では大半の人々が世界でも最も貧困な地域の一つに数えられる過酷な生活条件のもとに暮しており、都市の周辺部は職を求めながら得られない

農村からの移住者の溜り場となっている。

北東部はこうした共通の社会的経済的特性をもつ一方で、バイーア州の内陸部を南から北へ流れセルジッペ州に河口をもつサンフランシスコ川の河岸に展開する風景を含め、変化に富んだ生態学的状況に対応して多様な人間類型と生業形態を生み出している。国立地理統計研究所(IGBE)編集の『ブラジルの諸相と人間類型』(Tipos e Aspectos do Brasil, 1975)は、各地域に固有の風景と生業に基づく人間類型が列挙され、イラストつきで解説されている。この記述のなかで北東部は他の地域の倍の数の項目が挙げられページが割かれている: 職業および産業類型(「ハンモック製造人」(Fazendeira de Redes), 「水売り」(Aguadeiro), 「カロアー工場」(Usinas de Caroá), 「サンフランシスコ川の渡し守」(Barroqueiros do São Francisco), 「カンビテイロ」(Cambiteiros, カンビトと呼ばれる木製の鉤を動物の鞍に掛けて荷を運ぶ人), 「牛車引き」(Carreiros), 「渡り労働者」(Cassacos), 「ロウヤシ摘み」(Carnaubeiras), 「ヤギの飼育」(Criação de Caprinos), 「サトウキビ農場と砂糖工場」(Engenhos e Usinas), 「ファリーナ製造人」(Fabricante de Farinha), 「ラパドゥーラづくり」(Fabrico de Rapadura), 「砂金採集者」(Faiscadores), 「牛飼い」(baqueiro), 「カシュー摘み」(Cajueiros), 「ココ椰子採り」(Colhedor de cocos), 「ジャンガデイロ(筏乗り)」(Jangadeiros), 「小型投網漁師」(Pescador de Tarrafa), 「家畜追い人」(Tangerino), 「ココ椰子売り」(Vendedores de coco verde), 「干し草売り」(Vendedores de palha), 「ハンモック売り」(Vendedores de redes), 「サーヴェイロ船の船頭」(Saveiros), 「蜂追い人」(Rastejadores de abelhas), 「製塩業」(Salins), 「北東部の漁業類型」(Tipos de pesca no Nordeste), 「カロア引き」(Tirado de Caroá), 「北東部の牧童」(Vaqueiro do Nordeste), 居住類型(「サンフランシスコ川岸の住人」(Barqueiros do São Francisco), 「バイーアの黒人女性」(Negras Baianas), 「パウ・ヂ・アララー」(Pau-de-Arara, 北東部出身者に対する蔑称,) 動物(「ノルデスチの渡り鳥」(Aves de arribação no Nordeste)), 植物(「ババスヤシ」(Babaquais), 「ロ

ウ棕櫚」(Carnaubais), 「海岸の椰子」(Coqueiras das Praia), 「マングローブ」(Manguezais), 生態学的地域類型(「アグレストエ」(Agreste), 「カーチンガー」(Caatinga), 「原野」(Gerais), 「サンフランシスコ川地方の石灰窟」(Gruta Calcárias do São Francisco), 「サンフランシスコ川の滝」(Trecho Encachoeirado do São Francisco)), 構築物(「溜池の水」(Água de Cacimba), 「浮き桟橋」(Balsas), 「サトウキビ畑」(Canavial), 「海岸沿いの藁葺き小屋」(Caiçaras), 「奥地の囲い地」(Cercas sertanejas), 「カルアルの市場」(Feiras do Caruaru), 「牛の市」(Feira de Gado), 「奥地の市」(Feiras do Sertão), 「モカンボ」(Mocambos, 都市周辺の掘立て小屋), 「キャッサバ畑」(Mandiocal), 「家畜場の柵扉」(Porteira de Moirões), 「養魚場」(Viveiros de peixe)), 道具および工芸(「北東部の民陶」(Ceramica Popular do Nordeste), 「街道を走るトラックの文字銘版」(Legendas de Caminhões), 「レース編み」(Rendeiras)) 社会制度(「協働農作業」(Mutirão), 「協働牛飼い」(Vaquejada)), 交通手段および乗り物(「貨客両用トラック」(Misto)) など。

しかしノルデスチがブラジルにとってさらに重要な地位を占めるのは、単に地域の文化を指す名称であることを超えて、文学・美術・音楽・映画あるいは社会科学的著作に登場し、絶え間なく多様なイメージを生産し続けている一つのシンボルあるいはテーマだからで「ブラジル北東部」(Nordeste) という語は、国立旱魃対策事業監督局(IFOCS, Inspectoria Federal de Obras Contra as Secas) が活動する地域に対して 1919 年に最初に用いられた。この制度的な言説になかで、「ノルデスチ」(すなわちブラジル北東部) という言語表現は、絶えず旱魃に苦しめられているがゆえに、国家的公権力から特別の関心を受け取る対象となる(ブラジル) 北部地域的一部分という意味で用いられている。ノルデスチは、地域の大半が乾燥気候の下にあり、1877 年の起きた大旱魃が地域のより深刻な問題として提起されて以来、この大旱魃とそれに関連して生み出された様々イメージやテキスト全体から編制される想像的言説を指している。従ってブラジル北東部は、比較的新しい概念であ

るにもかかわらず、登場以来、詩、小説、戯曲、美術、音楽、映画のような文化的言説ばかりでなく経済学的政治的言説を通じて、ブラジルという国を理解するための中心的概念として存在し続けている。



3-2 レシーフェという都市

一方、レシーフェは、ブラジル北東部の海岸部に位置し、同じ北東部に属するバイーア州の州都サルバドールと並んで、奴隷貿易と砂糖きびプランテーションを中心とした経済によって繁栄し、現在もブラジル第5番目の人口規模をもつ大都市

圏(2007年現在3,655,000人)を形成している(レシーフェ市自体の人口は2007年現在1,549,980人でブラジルでは第9番目)。植民総督府の置かれていたサルバドールがしばしばブラジルにおけるアフリカ系文化の「本家」のような見方をされ、実際にアフリカ系文化の要素を強く残す独特の文化的伝統をもつブラジル北東部文化を代表する地域であるが、レシーフェは、それとは異なる別の伝統をもつ文化の中心である(荒井1993)。レシーフェとサルバドールはブラジル北東部の文化の二つの中心として、いわばライバル関係にあるが、通常ブラジル北東部の文化と言ったときは、レシーフェを中心とした地域の文化を指すことが多い。どちらが中心かどうかの論議はおくとして、レシーフェの文化の特性は、レシーフェ市を取り巻く都市圏とそこに住む市内の人口を越える数の住民によって生み出される。ブラジルの3大カルナバル(リオ・デ・ジャネイロ、サルバドール、レシーフェ)のうち、規模と国際的名声で群を抜いていたリオ・デ・ジャネイロが、近年、マンネリズムに陥っていると批判されているのに対し、後者の二つの都市のカルナバルはその創造性と革新によって俄然注目を浴びている。なかでもレシーフェのカルナバルは、「フォークロアのモザイク」という形容が与えられ、カルナバルのなかに周辺地域の様々なフォークロアの要素が並存していることが特徴とされるが、後背の農村地域からの人口流入とレシーフェ市の発展によって市の中心部から市内の周辺部あるいは市外の郊外へと向かう人口流出のせめぎあいを反映している。奴隷制時代に奴隷を慰撫するために始まったとされる制度(例えばカトリックの黒人信者組織と関連深い「コンゴ王の戴冠」のような祭り)は、もともと市中心部のあった貧困者居住地区の住民がその担い手であったが、都市の発展に伴う都市計画により、彼らの居住地区は市内および市外の周辺部に向かう。一方、早魃に苦しむ奥地の人々は生活手段を求めて都市へと向かう。これら二つの流れの合流点に生まれたのが、レシーフェのカルナバルである。カルナバルの行列集団の参加者は、どの種類の行列集団をとっても基本的には、近隣

に居住することによって繋がっている。従ってカルナバルを統括する現在ではカルナバルは彼らの大半は、レシーフェの後背地に住んでいる。G・フレイレは、レシーフェ市郊外のアピプコス(Apipucos)というところで生まれ育ったが、ここは、レシーフェとその後背地との境目に位置する場所、砂糖黍プランテーション農業が徐々に衰退すると同時に始まった都市化の始まりの時代において、かつては農園内の大邸宅に住んでいた上層階級が都市へ移住したさいの居住形態である「ソブラード」の一類型で、港に近い市街地のソブラードが商店などの商業施設を含む多層の建物であるのに対し、現代における郊外住宅、広大な郊外の邸宅がかつてもまた現在も多く存在する場所であるA・スアッスーナの住むカーザ・フォルチ(Casa Forte)も、市街地からアピプコスへ向かう道の、アピプコスの少し手前に位置する高級住宅地であり、後に詳述する「ジョアキン・ナブコ研究財団」は、アピプコスに本部と図書館と出版部、カーザ・フォルチに博物館と会議場、市街地に近いデルビー(Derby)にAV部門と展示スペースをもっている。

4. 教養層から民衆層への視線—レシーフェ市における3つの文化運動の歴史

4-1 ブラジル文化のイデオロギー

本論文は、ブラジル北東部の文化運動についての詳細な歴史的研究を目的としてはいないが、対象としているのはブラジル北東部に年代的順序に従って出現した文化運動とそれをめぐって生産された文化的生産物である。従ってそれらを互いに参照させることによって、その意味や機能が明らかにされる。例えばA・スアッスーナの「アルモリアル運動の諸原則」についてのテキストは、先行するG・フレイレの「地方主義宣言」のテキストや「民衆文化運動」のなかで配布されたパンフレット類の言説を抜きにしては読解可能ではないし、「マングベイト運動」から生み出される現代若者の言説を通じて初めて、G・フレイレやA・スアッスーナのような古い世代の言説の意味が明

らかにされる。それゆえここで扱われる種々の資料は、相互に参照しあうという意味で、互いが互いの先行研究となっているとも言える。

しかし歴史的研究ではないとはいえ、先行研究における20世紀ブラジルの文化イデオロギーの展開についての時期区分は、それ自体ある特定の時期の、あるいは特定の立場にあるブラジル研究者の状況認識の仕方を表明するものとして、ブラジルの文化的イデオロギーをめぐる言説の地層学的・考古学的知識として知っておく必要がある。この観点から重要な文献として挙げられるのは、カルロス・ギレルメ・モタの『ブラジル文化のイデオロギー（1933－1974）』（Mota, Carlos Guilherme, *Idelogia da cultura brasileira*（1933－1974）. São Paulo 1978）で提示されているブラジルにおける文化生産イデオロギーについての時期区分である：Ⅰ. ブラジル文化の再発見（1933－1937）、Ⅱ. 大学の最初の成果（1948－1951）、Ⅲ. 改革主義的拡大と再検討の時代（1957－1964）、Ⅳ. 急進的再検討（1964－1969）、Ⅴ. 依存の窮地（1969－1974）。各年代の詳細についての議論は本文に譲りたいが、ここではG・フレイレが地方主義宣言（1926）と『大邸宅と奴隷小屋』（1934）を発表した時期A・スアッスーナがアルモリアル運動を開始した時期（1970－1976）の社会史的解釈として、ⅠとⅤの時期についての要約を引用すると、

「Ⅰ. フレイレとF・ヂ・アゼヴェードの著作で跡づけられる1930年代はブラジル文化の再発見の時代と対応し、グラムシの表現を用いれば「大知識人」の解釈の時代である。」（Mota, 1978:p.48）

「Ⅴ. 最後の段階は、急進化に対する反作用としての閉鎖の時代である。生産のラインは、「組織の」知識人の急速な中立化あるいは排除によって切断される。ブラジル文化イデオロギーの大衆化と再活性化。イデオロギー体系における予測不能な裂け目の閉鎖。」（前掲書：p.49）

この著作が発表された1978年時点で、G・フレイレとA・スアッスーナはいずれも保守派の知識人としてすでに批判され克服された存在として把握されている。特にG・フレイレはⅠの時期を代

表するイデオロギーで新しい「ブラジル文化」を提唱した大知識人であり、その著作のポピュラリティーは、彼の思想が、A・グラムシのいう従属文化に対する支配文化（「領主のイデオロギー」）の表現であったことを示していると解釈されている。A・スアッスーナについては直接言及されていないが、アルモリアル運動を展開したのはⅣの時期であり、それゆえこの図式のなかでは、発展主義的イデオロギーに批判的であるがその方向が支配文化と戦う急進主義ではなく封建時代に回帰する保守主義に向かう知識人として理解される。A・スアッスーナの業績に対するこうした理解の仕方が知識人あいだでは一般的であったことは、この時期のA・スアッスーナの作品に対する評価あるいは活動に対する解釈を明瞭な形で述べている『ブラジル文化のイデオロギー（1933－1974）』（1978）と同年に出版された『民衆芸術と支配—1961年から1977年のペルナンブーコの事例』（Maurício, Ivan & als., 1978, *Arte Popular e Dominação*, Editora Alternativa.）から明らかである。しかしその後の社会状況とそのなかでの文化生産の戦略の変化は二人の業績に対する評価にも変化をもたらした。この変化への兆しはこの図式のなかですでに現われている。大衆文化の発展のなかでの文化依存の進行は大衆文化の担い手を含めた新たな文化生産の戦略と知識人の役割の見直しを迫り、そのなかでG・フレイレとA・スアッスーナに対する評価にも変化が現われたのである。特に後者はその後も現役で著作を発表し社会活動を続けている。彼の現在の姿をさまざまな側面から捉えているのは雑誌『ブラジル文学手帖』のA・スアッスーナ特集号である（*Cadernos de Literatura Brasileira*, No.10）。

『ブラジル文化のイデオロギー（1933－1974）』には、本論文で言及されている他の著作家についての有益な記述が豊富にあるが、なかでもA・カーンディドの「文化依存状況の枠組みのなかでの文化イデオロギーの分析を実行するための基準」に関する文章からの次のような引用は本論文のテーマに関連して重要である：

「(a) 垂大衆文化と依存について：「識字率の上昇は読者数の増加とは比例しない。しかし字を覚えた者はフォークロア段階にある字の読めない者と一緒に、大衆化された文化である一種の都市フォークロアに向かう。

(b) 文化的依存を超克するための基準：依存の超克における基本的戦略は、目の前にある外国からのモデルにではなく、自国の過去に模範によって影響された、一次的な作品を生産する能力である。それは内在的因果関係の確立を意味し、他文化からの貸付金を繰り入れるのではなく発展させることを意味する。

(c) ブラジルにおけるナショナリズムとその曖昧さについて、この批評家は地方主義的な傾向を取り上げて、その様式の超克を成熟の表明として指摘する：それゆえ多くの著者が、地方主義という形容詞を欠点として退けたが、実際には何の意味もない。だがそれは地方的な次元がより重要な多くの作品において存在し続けていることを妨げない。たとえいかなる強制的な傾向あるいは曖昧な国家意識の要件がなかったとしても。」(Mota 前掲書：pp.277-278)

ムニス・ヂ・アルブケルキ Jr. の『北東部の発明』は、「ブラジル北東部」概念の誕生とこの概念の分ちがたく結びついた「地方主義」の概念が詳細に記述されているが、著者によれば、この記述は、単なる歴史的な記述ではなく、M・フーコー的な意味での考古学的記述である。時期的にはG・フレイレの登場から現代までの様々な領域（思想、哲学、社会科学、小説、詩、戯曲、音楽、美術など）における言説のもつ広がりや編制を提示しようと試みている。著者は近代主義以前の地方主義と近代主義以降の地方主義を区別しているが、同書では、近代主義以前の地方主義を「自然主義的」と名づけ、(A・カーンディの表現を用いて)「ヨーロッパ人の眼でブラジルのより典型的な現実を観察し、田舎の人間を絵になるがセンチメンタルで滑稽な存在としてみなした」と定義している。近代主義運動の芸術家たちは、自国の文化を異国的で絵になるものとして見る自然主義的な視線を克

服するために、方法論的なコスモポリタニズムとナショナリズム的な主題選択のあいだで揺れ動き葛藤する自己意識を作品として具現化した。そのプロセスの中で発見されたのが、メシア主義運動が頻発し、早魃、匪賊たちの暴力、地方ボスの圧政と戦う「ブラジル北東部」であった。この南部の大都市で展開した近代主義の運動の影響下で誕生したのが1926年の「地方主義会議」に始まる文化運動で、彼らは「伝統的な地方主義」と自称した。その指導者的な存在だったのがG・フレイレであった。この「伝統的な地方主義」はレシーフェを中心とする地域において文化生産イデオロギーの伝統の一つとなり「レシーフェ伝統学派」としてA・スアッスーナにまで続いていることも明らかにされているが、詳細な分析についてはG・フレイレの時代が中心でA・スアッスーナのアルモリアル運動以降については概括的な展望にとどまっている。

『民衆芸術と支配——1961年から1977年のペルナンブーコの事例』(1978)は、100ページをわずかに超えるだけの小さな本であるが、調査資料集としても、また1970年代のこの地域に展開した思想的風潮の証言としても重要な本である。内容は、編者たちの立場を述べる短い序論に続き、(1) 議論、(2) 実態調査、(3) 証言 (4) 資料の4つの部分から構成されている。(2)はレシーフェを中心とする都市部に居住する民衆芸術家（その多くはその実践で生計を立てているのではない民俗芸術の実践家である）に関する社会経済的実態調査であるが、(1)は民俗芸術に対してさまざまな観点から強く関心をもつ、この時期に文化活動を展開したエリート階級に属する指導者たち（文化運動家、劇作家、観光学者、社会学者、大衆音楽家、解放の神学者）への、(3)は民衆芸術家への、インタビューである。この本が刊行されたのは、軍事政権下であった。その数年後の1987年には、1960年代のジョアン・グラール大統領の時期に、そのポピュリスム的な志向を代表していたミゲル・アライスはペルナンブーコ知事に返り咲き、その年のカルナバルでは歓迎の喜びに満ちた熱い

雰囲気があふれていたが、1976年に登場したアルモリアル運動を北東部のインテレクチュアル・ヒストリーあるいは文化政策史の流れのなかで捉えてみると、1960年前後に登場した知識人による「民衆的なもの」に対する一連のアプローチのなかに位置づけることができる。

この地域における教養層の民衆文化の関心の強さを示す証拠として挙げられるのは繰り返し現れる、民衆文化評価の運動である。表・1にまとめたのはこの地域に生まれた3つの文化運動を比較したものである。

	地方主義運動 Movimento Regionalista	民衆文化運動 Movimento de Cultura Popular	紋章学的運動 Movimento Armorial
年代	1920年代	1961 - 62	1970年代
指導的人物	Gilberto Freyre	Germano Coelho	Ariano Suassuna
綱領的文章	Gilberto Freyre 1926	Germano Coelho 1961	Ariano Suassuna 1976
主要イベント	Primeiro Congresso Brasileiro de Regionalismo (fevereiro 1926)	I Semana Universitária de Cultura Popular (maio de 1960)	Concerto e Exposição de Artes plásticas (18/10/1970)
対抗的、または同時代的運動	サンパウロの Modernismo	解放の神学 シネマ・ノーボ	Quinteto Violado ほか
政治的環境	ワシントン・ルイス大統領	ミゲル・アライス（左派の州知事、1988年にレシーフェ市長に復帰）	軍事政権
民衆文化への視点	文化相対主義	ポピュリスモ	エリート文化への参入
民衆文化からの評価	パターンリズム	啓蒙・共闘	搾取間テキスト性
北東部文化再創造への貢献	民衆文化研究の制度化 (Fundaj の創設)	草の根的活動形態	民衆文化の正統性

4-2 民衆的文化遺産の保護

——「地方主義宣言」(G・フレイレ)

(1)「様々な民俗的伝統に由来するもの (panelas de barro, facas de ponta, cachimbo de matutos, sandalias de sertanejo, miniaturas de almanjarras, figuras de cerâmica, bonecas de pano, carros-de-boi) を蒐集してんじのある博物館、ただ戦争の英雄や栄光ある革命の犠牲者の遺物だけが置いてある博物館ではない博物館が欲しい。“Radio Clube”の発展のために働く代わりに、また“Clubes Internacional”の栄光のために参集する代わりに Bumbas-meu-boi, maracatus, mamulengos, pastoris, clubes populares de carnaval を称え熱狂しよう。」G・フレイレの「地方主義宣言」(*Manifesto Regionalista*) というテキスト 1926年2月にレシーフェで行われた第1回地方主義会議の際に読み上げられた原稿。印刷物として出版されたのは1952年になってからである)

レシーフェという都市が、地方文化のある種の理想的であると私が考える理由の第2は、この都市が、「地域に沿った独自の社会科学を有し、かつそれを制度化している」という点にある。優れた社会科学の古典的業績が特定の地域についての研究調査から生まれるという事例は決して少なくないが、社会科学の著作がその地域の支配的イデオロギーとなり、さらには地方にありながら国立の研究機関として、博物館、展示場、資料倉庫、研究室、図書館を含む研究施設として制度化されていることは、G・フレイレの著作の批判的研究が始まっている現在でも稀有なことであるように思われる。

* G・フレイレの著作にはつぎのようなものがある。

1992 *Casa Grande & Senzala* (大邸宅と奴隷小屋), *Formação da Família Brasileira sob o Regime de Economia Patriarcal*. Editora Record. (初版は1933)

1942 *Prático Histórico e Sentimental da Cidade do Recife*, José Olympia Editora. (初版は 1933)

1981 *Sobrados e Mucambos* (町屋敷と掘っ立て小屋), *Decadência do Patriarcado Rural e Desenvolvimento do Urbano*. livraria 6 ed. José Olympia Editora. (初版は 1936)

1940 *Diário Íntimo do Engenheiro Vautier. Um Engenheiro Francês no Brasil*, José Olympia Editora.

1941 *Região e Tradição*, José Olympia Editora.

1976 *Manifesto Regionalista*, IJNPS

1990 *Ordem e Progresso. (秩序と進歩) Processo de Desintegração das Sociedades Patriarcal e Semipatriarcal no Brasil sob o regime de Trabalho Livre: Aspectos de um Quase Meio Século de Transição do Trabalho Escravo para o Trabalho Livre; e da Monarquia para a República*. Editora Record. (初版は 1940)

* 制度化された研究機関

① FUNDAJ (Fundação Joaquim Nabuco の略称) の設立

文化省の関連機関として、1949 年 6 月に、当時、国会議員でもあった G・フレイレの提案で Instituto Joaquim Nabuco de Pesquisas Sociais として設立された。

② 「北東部人間の博物館」の設立

4-3 民衆文化運動

(MCP, Movimento de Cultura Popular)

1960 年から 1964 年まで政権の座にあったゴラル大統領時代の前後は、北東部地方は激動の時代であった。1955 年に農民同盟が緒成され、また 1959 年には、この地域の後進性を克服するためにノルデスチ開発庁 (SUDENE) が設立された。1959 年にレシーフェ市長、1963 年にペルナンブーコ州知事にゴラル大統領と同様の民主主義的リベラルの立場をとるミゲル・アライスは選ばれると、この地方における以降の文化運動の展開に大きな影響力をもつことになる「民衆文化運動」(MCP, Movimneto de Cultura Popular) が組織され

る。この運動は子供および成人の識字教育を推進しそれを通じて民衆の社会的政治的意識を高めることを目的とし、その活動の一環としてフォークロアの研究を通じて民衆文化を解釈し発見し体系化するという規約をもっていた。この運動はゴラル大統領の追放により消滅したが、その創設のメンバーにはその後の運動において指導的な役割を演ずる人々の名前が見られる。すなわちジェルマーノ・コエーリェ Germano Coelho, アリアーノ・スアッスーナ Arianao Suassuna, エルミロ・ボルバ・フィーリョ Hermilo Borba Filho, アベラルド・ダ・オーラ Aeraldo da Hora, アロイージオ・ファルサン Aloizio Falcão, パウロ・フレイレ Paulo Freire, フランシスコ・ブレナン Francisco Brennand, ルイス・メンドンサ Luiz Mendonça らである。

民衆文化運動は、1960 年 5 月にカザ・アマレーラにある公園、シチオ・ダ・トリンダヂ (Sítio da Trindade) を本部として創設された。この場所は、レシーフェの住民が、サン・ジョアンやカルナバルなどのお祭りや遊びを楽しむため自由に使える空間である。運動の目的は、その団体規約に次のように記されている。(Prefeitura de Cidate do Recife, *Memorial do MCP (Movimento de Cultura Popular)*, Fundação da Cultura)

1. 個人または公的権力の援助のもとに子供および成人の教育を促進し活性化する。
2. 共同体に基盤を置き、憲法と一致して、任意の宗教教育をも保証する、統合的な教育を通じて人間であることのあらゆる可能性を十全に発展させるという、教育の基本的目的に注意を払う。
3. 民衆の文化的水準の向上を与えることにより、生活と労働に準備をさせる。
4. 専門化された教育を通じて民衆の物的水準の向上に寄与する。
5. 民衆文化の複合的側面を解釈し、体系化し、伝達することを目的とした枠組みを作ること。

この民衆文化運動は、組織としては比較的しっ

かりとした構造をもっていた。上記の目的を具現するために、運動は、(1) 文化育成部門 (DFC)、(2) 資料情報部門 (DDI)、(3) 文化普及部門 (DFC) の3部門を設けていた。中心となるのが文化育成部門で、この部門は、①民衆文化を解釈し、発展させ、伝達すること、②民衆教育の新しい方法とテクニックを創造し普及すること、③民衆文化を伝達する能力をもった人材を養成することを仕事としていた。そのために文化育成部門は10の部に分かれていた：1. 調査部（長は Paulo Freire）、2. 研究部（長は Anita Paes Barreto）、3. 造形芸術・工芸部（長は Abelardo da Hora）、4. 音楽、ダンス、歌唱部（長は Mário Cândia）、5. 映画、ラジオ、テレビ、出版部、6. 演劇部（長は Luis Mendoça）、7. ブラジル文化部、8. 集団厚生部（長は Geraldo Vieira）、9. 健康部（長は Arnaldo Marques）、10. スポーツ部（長は Reinaldo Pessoa）。(Prefeitura de Cidade do Recife 1986:936)

こうした堅固な組織力によって運動は短期間に急速に発展した。

626 グループ、201 学校

子供から大人まで各年齢層を含む 19646 人の生徒

425 人の教師と 174 人の助手

敷物、編み物、陶芸などの講座をもつ造形芸術と工芸センター

等々。

もう1点、民衆文化運動が組織したものなかで忘れはならないのは、民衆文化が展開する空間の確保である。「教育のインフォーマルな媒体」プロジェクトのなかで提唱されたもので、(1) 文化の広場、(2) 図書室、(3) ラジオを用いた民衆文化の普及。

いずれも特に目新しいものではないが、コミュニティ、特に貧困地域に、読書をしたり、コンサートを開いたり、議論する空間が確保できたこと。そして何よりも、運動の担い手たちが自らで向いてゆくスタイルあるいは方法をつくりあげたことは、社会運動家たち（キリスト教草の根共同体その他）ばかりでなく、音楽家や詩人たちの模範となった（キンテート・ヴィオラードはバスを用い

てどこへでも出かけてコンサートを行なうというスタイルをつくり実践した）。

この運動の盛り上がりの要因を考えると、地域の内外に運動を促進する状況があった。地域内部では、これまで述べたように州知事ミゲル・アライスの支援が最大の要因であるが、地域外の要因としては、ローマ教皇ヨハネス 23 世（在位 1958 - 1963）の指示のもとに開催された第2回ヴァチカン公会議（1962-1965）が挙げられる。この会議はもともと 1958 年に形成されたラテンアメリカ司教会議（CELAM, Consejo Episcopal Latinoamericano）が刺激となって生まれたものであったが、公会議以降、ラテンアメリカには、キリスト教神学を貧困や社会正義の観点から再構築し新たなキリスト者としての道を探ろうとする「解放の神学」が生まれた。レシーフェとオリンダの大司教であったエルデル・カマラ（Helder Pessoa Camara 1909-1999）をはじめとし、レシーフェおよびオリンダは解放の神学の発信地であった。

民衆文化運動（MCP）は、芸術家の参加者も多かったが、芸術運動ではなかったのも、特別の芸術スタイルは残さなかった。この運動が残した最大の成果は、運動の文化育成部門の調査部を担当していたパウロ・フレイレ（Paulo Freire 1904-1995）の「意識化」（社会的・政治的矛盾を認識し明らかにしながら、批判的に読み書きを学んでいこうとする方法）による識字教育、民衆教育の方法であろう。

しかし 1964 年に起きた軍事クーデターにより、突然に、「破壊的性格の非合法活動を行なってきた民衆文化運動」は治安維持のため、ただちに活動を停止せよとの通達を受ける。この政変を受け、州知事ミゲル・アライスは公職を追放され、P・フレイレも国外に追放される。こうして民衆文化運動（MCP）は突如終結を迎えるが、そこに結集した人間のその後の活動をたどってみると、その精神は形を変えて生き続けていることがわかる。

4-4 アルモリアル運動（Movimento Armorial）

アルモリアル運動は、1970年に、当時、ペルナンブーコ大学文化発展学部で教職に就いていたA・スアッスーナの指導の下に19人の作家、美術家、音楽家（別表）たちによって組織された文化運動で、民衆芸術をブラジル文化の象徴（*emblemática*）と考え、その表現やテーマに靈感を受けて、ブラジル独自の教養文化を構築しようとする試みであった。スアッスーナは1973年に設立の目的を説明した論文をジョルナル・ダ・セマナ（*jornal da Semana*）5月23日に発表し、運動が終結した後の1977年にこの文章を引用し、運動を総括した論を発表している（Suassuna 1977 “O Movimento Armorial”, *Revista Pernambucana de Desenvolvimento*）。彼自身による運動の主意は次のとおりである。

「ブラジルの紋章学的芸術は、北東部のロマンセイロの小冊子の魔術的な精神、小冊子の伴奏に用いられるヴィオラ、ハベカ、ピーファノ（いずれも北東部の民俗楽器）による音楽、表紙を飾る木版画、同様にこのロマンセイロと関連した芸術や芸能の様式と精神と繋っていることを主たる特色とする芸術である」（Suassuna 前掲書）。

筆者が初めてブラジル北東部に足を踏み入れたときはすでに運動は終結し、A・スアッスーナとメンバーの一人であったG・サミコと会うことができたのはずっとのちのことであった。この論文のフランス語訳は1976年、すなわち1年前に発表されているので、そのほうを先に読んでいたと思われる。25ページに及ぶ論文の大半は、アルモリアル芸術をジャンル別に分けて論じている（アルモリアル絵画、アルモリアル彫刻、アルモリアル陶器とタペストリー、アルモリアル版画、アルモリアル演劇・映画・ダンス、アルモリアル建築、アルモリアル文学、アルモリアル音楽、ロマンサル・オーケストラ）。その多くは生活芸術で、なかには理念だけあって実際には存在しなかったジャンルもあった。建築がそうである。陶器、タペストリー、彫刻は当時ホテルのインテリアなどで見ることはできたが、この運動の成果が形として残っているのは、A・スアッスーナ自身の戯曲と小説と詩、それと最初はレコードで、後には

CDに残された音楽のジャンルとレシーフェ郊外に工場兼ギャラリーをもつフランシスコ・ブレナンの陶器のみである。正確に言えば、A・スアッスーナを含めメンバーの何人かが運動の精神を保持しつつ活動している今も、運動は終わっていないといえるが、グループとしての活動は終わっているといっても良いだろう。むしろこの運動の精神に影響を受けた芸術家たちの活動、あるいは彼らのあいだの協演、共同制作の中にアルモリアル運動の足跡を探るべきであろう。本論で取り上げられているキンテート・ヴィオラードやマンゲビート運動の若者たちもそのなかに入れてよいだろう。

次節では、この運動が行なわれていた時期にどんな見方や評価があったかについて考えてみよう。

5. 教養層と民衆層の一体感

カルナバル調査後にレシーフェを何度も訪れているさい、なぜ自分はこの地域にこんなにも惹かれているのかを自問しているときに会ったのが、キンテート・ヴィオラード歌っている「*Falhina do Mesmo Saco*」という曲である。この曲は、1992年にレシーフェ出身のミュージシャン、レニーニがリリースした『魚の眼』（*Olho de Peixe*）のなかに入っている曲で、北東部出身の歌手の多くがカバーしている。もちろん歌詞だけでなく曲自体がこの地域の音楽的伝統にルーツをもった曲であるが、この曲を聴いているだけで、この曲こそ本論文が主題としようという「地域文化の理想」を体现しているような印象を持つが、レニーニのコンセプトに加えようとしている、演奏をしているキンテート・ヴィオラードの地域の民衆文化に対するスタンスを読み取ることができる。

北のライオン

（国安真奈訳）

この胸には脈打っている

北東部のfolkloreの心が

ボー・ブンバーのマテウスのように

バスチアンのように

Movimento Armorial のオリジナル・メンバー19人

(Candace Slater, "Folk Tradition and the Artist: The Northeast Brazilian Movimento Armorial," Luso-Brazilian Review, 16 (1979) より)

名前	生年	出生地	学歴	生計手段	父親の職業	表現形態
Ariano Suassuna	1927	(パライーバ州)	学士 (法律および哲学)	美学教授 (国立ベルナンブーコ大学大学), 各種の講師, レシフェ市教育文化長, 印税	パライーバ州知事, 両親とも有力な地主の家計出身	小説, 戯曲, 詩, グラフィックス
Marcus Accioly	1943	Engenho Laureano Aliança (ベルナンブーコ州)	法学士	国立ベルナンブーコ大学文化問題学部 (DEC) 学部長	両親とも地主; 父親は砂糖輸出商の家系の出身	詩
Deborah Brenand	1929	Engenho Ramo da Lagoa (ベルナンブーコ州)	私立高等学校	家族の収入	両親とも地主の家系の出身	詩
Maximiano Campos	1943	Engenho Guarani (ベルナンブーコ州)	法学士	FUNDAJ の職員	両親とも富裕農民層の出身	小説, コント
Raimundo Carrero	1944	Salgueiro (ベルナンブーコ州)	私立高等学校	DEC の職員, ジャーナリスト	行商人	小説, コント
Janice Japiassu	1946	Fagenda Monteiro (ベルナンブーコ州)	哲学士	SUDENE の職員	両親とも地主	詩, グラフィックス
Angelo Monteiro	1943	Penedo (アラゴアス州)	哲学士	DEC の職員	巡回歯科医	詩, エッセイ
Aluizio Monteiro	1932	Itamaracá (ベルナンブーコ州)	小学校	アーティスト, DEC の職員	漁師	絵画
Francisco Brennand	1928	Engenho São João (ベルナンブーコ州)	私立高等学校 ヨーロッパ留学	アーティスト, 主な収入源は壁画制作, 自身の工場を持つ	父親は企業経営者, 母親は砂糖きびプランテーション所有者の家系	絵画, 陶器, 壁画, タペストリー
Miguel dos Santos	1946	Caruaru (ベルナンブーコ州)	小学校	アーティスト	行商人, 雑貨商	絵画, 陶器
Fernando Lopes da Paz	1934	Recife (ベルナンブーコ州)	正式な学校教育は受けていない	DEC に雇われたアーティスト	露天マーケットの肉屋	絵画, 彫刻 (アルモリアルのキリスト)
Lourdes Magalhaes	1924	Engenho Pombal (ベルナンブーコ州)	私立高等学校	家族の収入	両親とも地主の家系の出身	絵画
Gilvan Samico	1928	Recife (ベルナンブーコ州)	私立高等学校, リオとヨーロッパに学ぶ	アーティスト	小売商	木版画, 絵画
Edison Eulalio Cabral	1949	Campina Grande (ベルナンブーコ州)	大学 (音楽)	音楽会, パライーバ大学より給与	セールスマン	ギター
Antonio Jose Madureira	1950	Natal (リオ・グランデ・ド・ノルテ州)	建築と音楽を学ぶ	音楽会, パライーバ大学より給与	軍人	
Antonio Carolos Nobrega de Almeida	1953	Recife (ベルナンブーコ州)	文学と音楽を学ぶ	音楽会, パライーバ大学より給与, 家族の収入, DEC より給付金	医師	
Fernando Torreses Barbosa	1945	Paulo Jacinto (アラゴアス州)	音楽を学ぶ	音楽会, パライーバ大学より給与, 絵画彫刻作品の売却収入	乾物商	
Edison Vieira	1948	Piranhas (アラゴアス州)	音楽を学ぶ	Quinteto Armorial を離れてからはレシフェのクラブでフルートを演奏	雑役夫	
Sebastiao Vila Nova	1944	Fernao Velho	社会学士	FUNDAJ の社会学者	会計補佐	

メストレー・ヴィタリーノの人形のように
おれは踊る
イタマラカーでシランダの踊りを
カルロス・ペーナ・フィーリョの書いた
歌の一節のように
カピーバのフレヴォで
アルモルアル・オーケストラの伴奏に乗って
おれは 踊るカピバリービ
ジョアン・カブラルの著作の中で
おれはサンベント・ド・ウナのママレンゴだ
マラカトゥのリズムに乗って
アリアーノ・スアッスーナの書いた芝居のように
カルアルの市場の真ん中で
バストリル・ド・ファセッタのカネカッカ修道
士になって
百合の花を抱え
ノーヴァ・ジェルザレンへ向かう
おれはレイス・ゴンザーガ
恋人には香草を
おれは白人とインディオとの混血
カーザ・フォルチの出身
ペルナンブッコの男
北のライオンだ
おれはジョアキン・カルタピーゾのマカンピーラ
静かに響く太鼓の夜
カルナバルに紛れ込んだピッフィの楽団
おれはカルンガ
カルナバルのはじまりオ知らせる
おれはお祭り
オリンダの通りを下る
夜更けの男
この行列を従えて
帆掛け舟を操って
ジャボアタンの祝祭を呼吸する
白人とインディオの混血だ

Quinteto Violado “Farinha do mesmo saco”

Leão do Norte (Lenine-Paulo Cesar Pinheiro)

Sou coração do folclore nordestino

Eu sou Mateus e Bastião do Boi-Bumbá
Sou boneco do mestre Vitalino
Dançando uma ciranda em Itamaracá
Eu sou um verso de Carlos Pena Filho
Num frevo de Capiba
Ao som da Orquestra Armorial
Sou Capibaribe
Num livro de João Cabral
Sou Mamulengo de Sao Bento do Una
Vindo num baque solto de um Maracatu
Eu sou um auto de Ariano Suassuna
No meio da feira de Caruaru
Sou frei Caneta no pastoral do Faceta
Levando a Flor da Lira pra Nova Jerusalém
Sou Luiz Gonzaga
E vou dando um cheio de meu bem
Eu sou mameluco, sou Casa Forte
Sou de Pernambuco, eu sou o Leão do Norte
Sou macambira de Joaquim Cardoso
Banda de pife no meio do canavial
Na noite dos tambores silenciosos
Sou calunga revelando o carnival
Sou folia que desce lá de Olinda
Homem da Meia-Noite
Eu sou, puxando esse cordão
Sou jangadeiro na festa de Jaboatão
Eu sou mameluco...

レニー二作詞の曲のタイトル「北のライオン」はレシーフェ市という都市を意味している。ライオンはレシーフェ市のシンボルであり、市旗の図柄になっている。「北のライオン」の歌詞は、レシーフェ市に住む人々が共有する文化空間を要約したものである。G・フレイレが『地方主義宣言』および『レシーフェの街の実践的、歴史的そして感傷的なガイド』で示した、名指し記述することによって場所が保存し喚起する感情を歌ったものである。さらに別な言葉で言い換えれば、「北のライオン」で歌われているのは、現象学的地理学者のトゥアンが「人々と、場所あるいは環境とのあいだの、情緒的結びつき」（トゥアン 2008：27）

という意味での「トポフィリア」としてのレシーフェである。

『同じ袋の粉』というアルバムには、レシーフェ出身のアーティストであるレニーニがつくった「北のライオン」のほかにも、サンフォニアと呼ばれるブラジル北東部の伝統的楽器の若い世代の奏者が古いスタイルで演奏することを寿いだ曲、レシーフェ近郊の民芸品の市でも知られるカルアルで行われるフォロ（Forro）と呼ばれる伝統音楽によるダンス・パーティを詠った曲、若者の最先端の音楽グループの一つであったナッソン・ズンビ（Nação Zumbi）のレパートリーなど、ジャンルや世代を超えた曲を単に並列するだけでなく、同じアルバムのなか並列して演奏すること自体に強い主張が込められている。このアルバムを発表したキンテート・ヴィオラードというグループは、ブラジル北東部の基層文化に根ざしたエリート文化を再創造しようと試みたアルモリアル運動とほぼ同時期に結成され、音楽産業の中に身をおいて、一方においてマスメディアによって大衆文化により近い位置に、また一方においてキリスト教基礎共同体運動や識字運動の活動家と同様の草の根の活動、民俗文化の積極的研究活動にも携わってきた。このグループの代表作である『ある牛飼いのミサ』は、1954年に死んだ牛飼いのハイムンド・ジャコーに捧げられるミサのための曲で、ジャコーの終焉の地であるベルナンブーコ州セリータで毎年演奏される。彼らの商業的成功に刺激されて、同じ志向をもったグループが北東部各地で活動を始め、ナッソン・ズンビもその一つであると言えるが、彼らを超える成功を実現した。

キンテート・ヴィオラードの主張は、エリート文化と民衆文化の融和的並置・混合というナイーブなメッセージである。二つの文化のあいだには格差や葛藤があることは現実であり、1970年代、民衆文化を基盤にエリート文化を創造しようとするアリアーノ・スアッスーナの創作活動が、民衆文化の富の収奪あるいは搾取だと批判されたことは事実である。

人脈的にA・スアッスーナやジョアキン・ナブ

コ研究財団の近くにて、また民衆文化運動（MCP）の精神を引き継ぐキリスト教草の根共同体や社会運動家との関係をもつキンテート・ヴィオラードは、アルモリアル運動が始まったのと同じ年に結成され、アルモリアル運動と同じ精神と方法をポップ音楽に翻訳することで、より多くの人々、より広い社会層に訴えることを目的としていた。キンテート・ヴィオラードとアルモリアル運動のメンバーの経歴を比較してみると社会層から言えばそれほど違いがないと思われる。違いはむしろ文化の多元性をいかに考えるかについての方向性が異なるだけである。結成から4半世紀を過ぎた時点で、今度は世代による文化の違いに直面したキンテート・ヴィオラード（マンゲビート・ボーイと同じ世代であるメンバーの息子が新メンバーとして加わっている）が、現在の状況を振り返ってあらためて、北東部の人々に送ったメッセージが『同じ袋の粉』（Farinha do mesmo saco）というアルバムだったのでないだろうか。A・スアッスーナの「栗色の貴族の民」の概念が、カザグランデと奴隷小屋、ソブラードとムカンボのあいだの距離を縮めたようにしたように、「同じ袋の粉」の精神は、レシーフェという街の「エートス」を音楽にしたものと考えられる。

キンテート・ヴィオラードは、その音楽的位置について言えば、民俗文化の担い手と「ジョアキン・ナブコ研究財団」の研究員やアルモリアル運動の参加者と全国的レベルで活動する大衆音楽の若い世代のアーティストを結びつける結節点に位置している。『同じ袋の粉』というアルバムにはそうした彼らの立場を直裁的にかつ哲学的に表現する曲が選ばれているが、そのなかでも「北のライオン」はその中心的思想を表現している。この曲に表現されているのは「文化の民主主義」（すべての文化は等価である）と「多声的文化の場の存在」（互いに異なる文化に属すると思われるが一つ場でぶつかり合い融合しながら混淆文化をつくりあげていく）という思想である。

この歌詞には、本論文で主題として取り上げたレシーフェを中心とする北東部の自然から、民俗

文化、教養文化のさまざまな文化要素が詠いこまれ、この歌のもつ意味を理解できれば、この地域の文化的状況の概要はほとんど理解できてしまうほどである。この歌はレニーニという北東部出身のアーティストによって作られ、多くの北東部出身の歌手たちのレパートリーになっているが、とりわけ注目すべきはブラジル北東部を地盤に活動する音楽グループ、キンテート・ヴィオラードによって「同じ袋の粉」(Farinha do mesmo saco) というタイトルの CD アルバムに収録されたことである。「同じ袋の粉」という表現は元来、日本語の諺「同じ穴の貉」と同様に否定的な意味、例えば数人の政治家の汚職が同時に発覚したとき「どうせやつらは同じ袋の粉さ」という風に用いられる。しかしキンテート・ヴィオラードは、「差異を越えて共通の基盤をもつ仲間たち」という意味で 1999 年にリリースされた CD アルバムのタイトルに採用した。

5-2 「北のライオン」の歌詞の中で言及されている事項から見るレシーフェの文化的世界

- (1) ボイ・ブンバー：クリスマスの時期を中心にブラジルの各地で行われる民衆娯楽の 1 つで牛の死と再生をめぐる筋が展開する野外劇でマテウスとバスチアンはその登場人物。
- (2) ヴィタリーノ親方とその作品：ヴィタリーノ親方の泥人形：ベルナンブコ州内陸部の街カルアルの市場で売られる土の人形でブラジルを代表する民芸品である。なかでもヴィタリーノ親方(1909 - 1963) の作った人形は傑作とされ、博物館に展示保存されている。
- (3) シランダー：歌いながら輪になって踊る踊り。一種の門付け芸として、金品を受け取ることもあり、これを指導する人物を mestre ciranda または cirandeiro と呼ぶ。
- (4) カルロス・ペーナ・フィーリョ (1929 - 1960)：ポルトガル移民の子としてレシーフェに生まれる。一時期ポルトガルに移住するが 12 歳のときのレシーフェに戻ってからはずっとこの地に居住し、弁護士をしながら、詩人、ジャーナリ

スト、作詞家として活躍したが、自動車事故のために早逝した。キャピーバと共作のボサノバ A Mesma Rosa amarela は大ヒットしたが、彼とはたくさんカルナバルの曲を合作している。

(5) キャピーバ (1904 -)：ベルナンブコ州スルビン生まれの音楽家で、本名は Lourenço da Fonseca Barbosa, で「キャピーバ」は愛称である。ジャズ、クラシックなど幅広いジャンルで活躍し、なかでもフレヴォ、マラカツ、サンバなどカルナバルの曲を数多く作曲して、あらゆる社会層に人気のある作曲家の一人である。

(6) フレヴォ：レシーフェのカルナバルを代名詞であり最大の魅力ともなっている、激しい足の動き (passo) を伴う踊り。

(7) オルケストラ・アルモリアル：Cussy de Almeida の指揮のもとにベルナンブコ州立音楽学校のメンバーを中心に結成されたオーケストラで、1970 年 10 月 18 日の紋章学的運動の公式の声明のさいにデビューした。その後運動が目指す音楽の概念の違いをめぐるスアッスーナと袂をわかった。

(8) キンテート・アルモリアルの CD ジャケット、アルモリアル運動に参加した芸術家たちによるデザイン。特に左上のジャケットは、リテラトゥーラ・デ・コルデルの表紙絵 (本文参照) にインスピレーションを得た図柄で評判となった。

(9) キャピバリビ：レシーフェ市の中心を流れる河。レシーフェを代表する詩人ジョアン・カブラウ・ネットによって唱われている。

(10) ジョアン・カブラウ・ネット (1920 - 1999)：レシーフェ生まれの詩人。外交官として世界各地を回る生活のなかで詩を発表した。特にベルナンブコの風物を歌った詩は多くの人に読まれている。

(11) マラカトゥ・バケ・ソルト：「マラカトゥ・フラル」とも呼ばれるレシーフェのカルナバルの行列集団の一種。

(12) カルアルの市場：レシーフェから 135km 内陸に位置する町で、ブラジル最大規模の市 (レース、泥人形、革製品など地域の民芸品をはじめあらゆるものが売られている) と 6 月のサン・ジョアン

の祭りの盛大さで知られている。

(13) アリアーノ・スアッスーナのアウト：「アウト」(Auto) はポルトガルから移入された演劇の様式で、1956年にこの形式を用いて書いた『Auto da Compadecida』によって、スアッスーナは戯曲家として全国的規模の名声を得てきた。

(14) パストリル・ド・ファセッタのカネカッカ修道士：パストリルはクリスマス・シーズンに上演されるキリストの生誕劇であるが、宗教的なパストリルに対し世俗的なパストリルというジャンルがあり一種のコメディで、作者＝演者の創作による部分が多くカネッカ修道士のような歴史上の人物も登場する。「ファセッタ老人」(1925 - 1961) はその代表的な演者である。

(15) ノヴァ・ジェルザレム：ペルナンブコ州奥地の街ノヴァ・ジェルザレムでは世界最大級の野外劇場で毎年復活祭の期間に8日間にわたってでキリストの受難劇が上演されている。

(16) ルイス・ゴンザーガ (1912 - 1989)：「バイオンの王様」と呼ばれたペルナンブコ州出身の音楽家。ブラジル北東部の音楽としてのバイオンが全国に知られるようになったのは彼の功績である。

(17) ノルデスチの民俗楽器, ピフェ (またはピファノ)。Banda de Pife は João de Pife をリーダーとし、ブラジル北東部の伝統音楽をレパートリーとするグループ。

(18) カルンガ：レシーフェのカーニバル集団の一種である「マラカツ・バケ・ヴィラード」の行列で守護の役割を果たす人形で、行列の出発のさいに行われる儀礼から、アフロ・ブラジル宗教とマラカツ・バケ・ヴィラードの関連を示す要素である。

(19) オリンダのカルナバル集団：オリンダは植民地時代の美しい町並みで世界歴史遺産に指定されているレシーフェの隣町。この町のカルナバルにはレシーフェと異なる独自性があり、特に芸術家が多く住む旧市街には若い世代が多く集まる。

(20) オーメン・メイア・ノイチ「真夜中の男」：オリンダのカルナバルで道を練り歩く巨大な人形。1932年のカルナバルに現れ、土曜日の午前0

時にスタートすることからこう呼ばれた。

(21) 静かに響く太鼓の夜 (noite dos tambores silenciosos)：カルナバル最終日の夜 (火曜日の夜)、市内の Pátio do Terço で行われるイベントで、亡くなった奴隷たちを偲んで黒人意識を高揚するテーマの音楽的イベントが企画される。

(22) アルモリアル運動 → 本文参照。

(23) アリアーノ・スアッスーナは、戯曲では民俗芸能の人形劇マムレンゴ、小説では民衆本リテラトゥーラ・ヂ・コルデウの表現形式、そのほか神話、諺、裁判判例集などで用いられる常套的言語表現を借用している。こうしたスアッスーナの手法は、ミハエル・バフチンによって明らかにされた民衆文化、とりわけ民衆の言語表現に対する F・ラブレのアプローチと共通のものと評価されている。(cf. Marneiro 1977)

(24) ペルナンブコ学生演劇のメンバーとそのリーダー、エルミーロ・ボルバ・フィーリョ夫妻

(25) ジルバン・サミコ：アルモリアル運動に参加した版画家。オランダ在住であった。

(26) フェルナンド・ブレナン：アルモリアル運動に参加した陶芸家、画家、壁画作家。レシーフェに郊外に広大な製陶工場兼ギャラリーをもつ。

(27) ミゲル・ドス・サントス：アルモリアル運動に参加した陶芸家。

(28) キンテート・アルモリアル of theメンバーとブラジル北東部の民俗楽器ハベカ

(29) アンターニオ・ノブレガ：アルモリアル運動に参加した音楽家。キンテート・アルモリアル of theメンバーであったが、現在はソロの音楽家として活動中。

(30) マムレンゴ：ペルナンブコ州で人気のある民衆娯楽の一つである人形劇。集落の小さな公園などで上演される。

(31) 『北のライオン』の作詞家、レニーニ。マメルコ (Mameluko)：白人男性と先住民女性のあいだにできた混血の息子。

6. 終りに——批判と継承

キンテート・ヴィオラードは、その音楽的位置

について言えば、民俗文化の担い手と「ジョアキン・ナブコ研究財団」の研究員やアルモリアル運動の参加者と全国的レベルで活動する大衆音楽の若い世代のアーティストを結びつける結節点に位置している。『同じ袋の粉』というアルバムにはそうした彼らの立場を直裁的にかつ哲学的に表現する曲が選ばれているが、そのなかでも「北のライオン」はその中心的思想を表現している。この曲に表現されているのは「文化の民主主義」（すべての文化は等価である）と「多声的文化の場の存在」（互いに異なる文化に属すると思われるが一つ場でぶつかり合い融合しながら混淆文化をつくりあげていく）という思想である。しかもこの思想の実践の牽引役となったのがキンテート・ヴィオラードでも A・スアッスーナとその追従者からでもなく、若い世代（マンゲビートの運動家たち）であったという点に、この地域の現時点での文化創造の独自性がある。

残念ながらマンゲビーチ運動の牽引役であったシコ・シエンスは 1996 年交通事故で唐突な死を迎えた。しかし彼がレシーフェという都市の若者たちのあいだに播いた種は着実に開花している。最後にシコ・シエンスが A・スアッスーナについて述べた言葉を一つとマンゲビート運動の歴史の著者による葬儀の日の A・スアッスーナの姿を引用しよう。

「ゲハ・ペイシェをそしてアルモリアル音楽をもっと聴きたい。アリアーノ・スアッスーナほど、民衆的なものと教養的なものを接合しようとした人間がかつているだろうか」

(Teles 1995: 332, テレス自身が *Jornal do Comércio* 紙上で行なったインタビューから)

「たくさんの人の中で、ひときわ人々の注意を惹いた人物の一人がいた。その痩せて背の高い紳士は、シコ・シエンスの近親と区別のつかない場所で棺を前にして泣いていた。この紳士こそ、ペルナンブーコ州政府文化政策担当特別職の、アリアーノ・スアッスーナ教授であった。美的感覚の対立にもかかわらず、スアッスーナ先生は「シコ・シエンス」を誇りに思っていたに違いない。」(Teles 1995: 303)

G・フレイレおよび A・スアッスーナは、民俗文化を賛美し、民俗文化との交流を提唱したが、レシーフェ文化圏の「住み分け」構造を乗り越えることはなかった。そこに「(富裕層の) パーナリズム」あるいは「エリート文化による民衆文化の盗用」といった批判が生まれる余地があった。前述のようにマンゲビートの運動は、「住み分け」によって互いに隔てられていた社会層の交流を実行したのである。

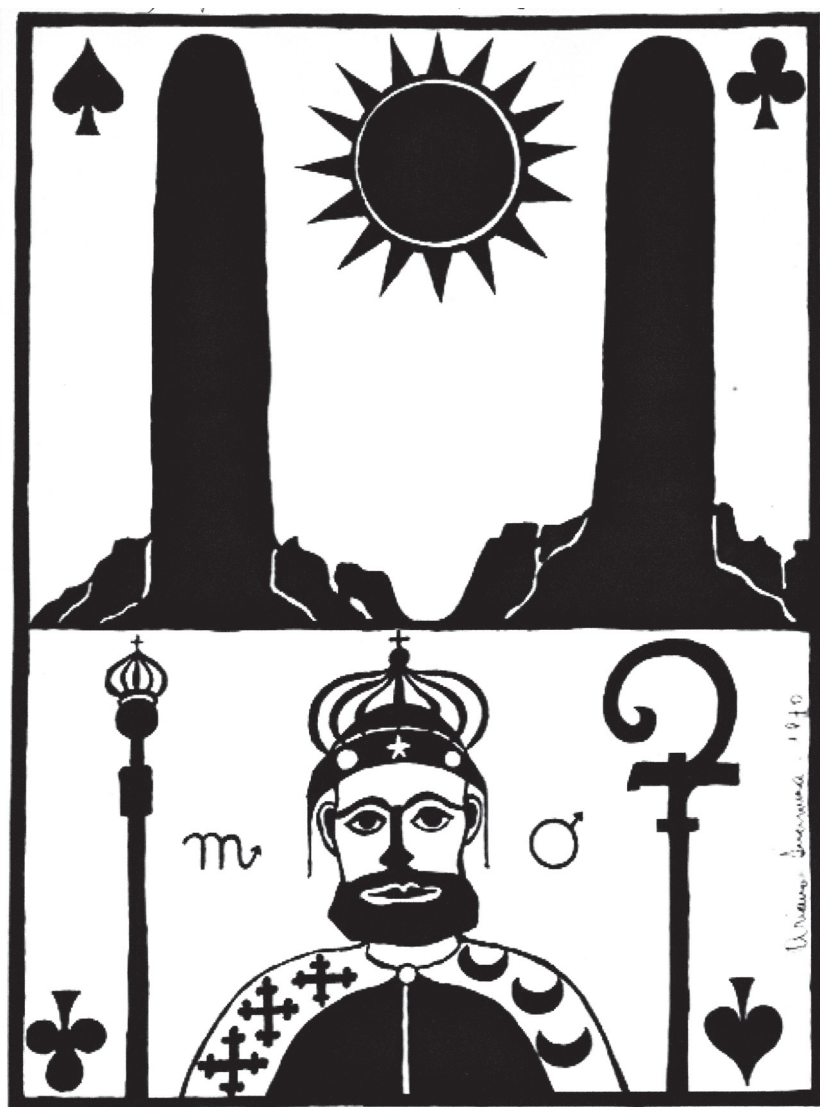
参考文献

- Claude Grignon & Jean-Claude Passeron,
1989 *Le Savant et le Populaire: Miserabilisme e Populisme en Sociologie et en literature*, Gallimard/Le Seuil.
- Freyre, Gilberto
1992 *Casa Grande & Senzala*, Formação da Família Brasileira sob o Regime de Economia Patriarcal. Editora Record. (初版は 1933)
- 1942 *Prático Histórico e Sentimental da Cidade do Recife*, José Olympica Editora. (初版は 1933)
- 1981 *Sobrados e Mucambos, Decadência do Patriarcado Rural e Desenvolvimento do Urbano*. livraria 6 ed. José Olympica Editora. (初版は 1936)
- 1940 *Diário Íntimo do Engenheiro Vautier*. Un Engenheiro Francês no Brasil, José Olympica Editora.
- 1941 *Região e Tradição*, José Olympica Editora.
- 1976 *Manifesto Regionalista*, IJNPS
- 1990 *Ordem e Progresso. Processo de Desintegração das Sociedades Patriarcal e Semipatriarcal no Brasil sob o regime de Trabalho Livre: Aspectos de um Quase Meio Século de Transição do Trabalho Escravo para o Trabalho Livre; e da Monarquia para a República*. Editora Record. (初版は 1940)
- 1970 *Oh de Casa !*, I.J.N.P.S.
- 1985 *Arquitetura, sociedade e cultura nos trópicos*, in *Anais do I Seminário Nacional de Arquitetura nos Trópicos*, Editora Massangana.
- Marinheto, Elizabeth, 1977 *A Intertextualidade das*

Formas Simples. (Aplicada ao Romance d'A Pedrado Reino, de Ariano Suassuna), Oficina Olimpica, Rio de Janeiro.

荒井芳廣

- 1979 a 「フォークロアとコミュニケーション」, 山中一郎編『社会学シンポジウム』, 文教書院, pp.124-142。
- 1979 b 「民衆的小冊子におけるメシアニズム：ブラジル北東部における宗教的イデオロギー」, 中牧弘允編『神々の相克』, 新泉社, pp.191-221。
- 1982 「ブラジル北東部における民衆的小冊子：リテラトゥーラ・デ・コルデル」, 『国立民俗学博物館研究報告』, 7-3, pp.585-631。
- 1987 「日常生活における書物の不在：実用書と識字率」, 山岸健編『日常生活と社会理論：社会学の視点』, 慶應通信, pp.335-357。
- 1992 「レシーフェのカルナバル」, 中牧弘允編『陶醉する社会：中南米の宗教』, 平凡社, pp.85-116。
- 1993 「ブラジル北東部研究の二つの流れと G・フレイレ」, CAS ニュースレター, 慶應大学地域研究センター, 58, pp.1-2。
- 1994 「ブラジル黒人の居住空間に関するノート」, 『神奈川工科大学研究報告 A』, 18, pp.1-12。
「[教会の扉] の記号学」, G・アンドラーデ, 中牧弘允編『ラテンアメリカの宗教と社会』, 新評論, 155-175。
- 1997 「セバスチャニズムとカルロス・マグノの物語ーブラジルにおける民衆的信念」, 『創文』 391, pp.25-28。
- カストロ, ジョズエ・デ・(国際食糧農業協会訳)
1955 『飢えの地理学』 理論社 (*Geography of Hunger. New York, 1952* Editora O Cruzeiro, Rio de Janeiro)。
- ジュリアン, F. (西川大二郎訳)
1976 『重いくびきの下でーブラジル農民解放闘争ー』, 岩波新書 967 (Francisco JULIÃO, *Que são as ligas camponesas?* (Rio, 1962)



A・スアッスーナの小説『王国の礎』の挿絵